



Title	メルロ＝ポンティと<子どもと絵本>の現象学 一子どもたちと絵本を読むということー
Author(s)	正置, 友子
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/69705
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (正 置 友 子)	
論文題名	メルロ＝ポンティと＜子どもと絵本＞の現象学 —子どもたちと絵本を読むということ—
<p>論文内容の要旨</p> <p>子どもたちと絵本を読むという行為を続けてきた。ほぼ50年間、子どもたちと絵本を読み続け、今も読んでいる。あかちゃんから小学生、時には高校生くらいまでの子どもたちと、絵本を読むという行為を続けながら、生きてきた。本論では、幅広い年齢の子ども（たち）ではなく、乳幼児期前半と言われる、誕生から3歳代の「子ども（たち）」に登場を願う。この年頃の子どもたちとは、もともと密度濃く出会い、もともとたくさん絵本を読んできた。そして、多くの驚きを与えてくれ、この時期が人の一生のなかでどういう意味を持つのかを考えさせてくれる気づきを与えてくれた。人として誕生してからのおよそ3年間は、その後のどの時期とも比べ物にならないほどの密度の濃さで、からだも心も生成されていく時期であることを、子どもたちは身をもって教えてくれた。そして、そのことがどういうことであるかを思索的に導いてくれたのは、メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』であった。誕生して3年間に、子どもたちと絵本を読むことがどのような意味を持つのか、この時期は人の一生のなかでどのような意味を持つのかを、メルロ＝ポンティと共に考えてみたいというのが本論の目的である。</p> <p>この世界に生まれたばかりのような子どもたちから、4歳になるまでの子どもたちとの絵本読みは、私にいくつかのことについて考えるようにさせてくれたが、大きく纏めると、以下の3点になる。ひとつ目には、「ひとなる」過程の最初の時期の子どもたちの存在の意味であり、ふたつ目には、そのことに関わった絵本の可能性であり、みつ目には、子どもたちと絵本を読むことに関わる他者（おとな）の役割である。</p> <p>まず、本論では重要な用語となる「ひとなる」について、述べておきたい。子どもが成長する過程については、一般的に「発達」が使われる。右肩上がりのイメージを持つ「発達」という言葉を使うことに躊躇していた時に、子どものころによく耳にしていた「ひとなる」が、私の内側から浮かび上がってきた。「ひとなる」という言葉は、尾張地方の方言と聞いていいだろう。名古屋で生まれ育った私は、祖母が近所の娘さんに久しぶりに会ったときなど、「あんた、よう、ひとなったなあ」と言っていた。確か、キュウリやナスにも「ひとなった」を使っていた。『広辞苑』にも、「ひとなる」は掲載されており、「人成る」の漢字を当て嵌めている。しかし、「ひとなる」を「人成る」とすると失うものがある。「ひとなる」は、人が生き物として持っている「生」の種のようなものを、環境（人も自然も）によって水や養分を与えられて生まれ、自ずから、そして他の人たちと一緒に年を重ねていくというイメージを私にあたえ、この言葉を採用した。また、生きとし生けるもの全てに使うことができる。</p> <p>子どもたちと絵本を読んでいる時、子どもたちはからだ全体で自分を表現している。この表現の仕方を、ここでは「からだ語」と名付けよう。一般的には、身体表現とも言われ、人は、言語による表現だけではなく、身体でも多く、時には無意識のうちに、表現している。しかし、言葉の習得期に当たる幼い子どもたちの場合、言語で表現するよりも自らの身体で、より多く、より深く、自分を語っている。おとなの身体表現では、それとなく出てしまう表情や身振り、例えば、話している内容とは裏腹に、顔には怒りの表情が出ていたり、腕が震えていたりするが、幼い子どもたちの場合、もっと率直に、直接に、身体が語ってくれている。これを「からだ語」と呼びたい。「からだ語」は、子どもたちが発する言葉から切り離されるものではなく、ここでは、発せられる言葉も含めて「からだ語」と呼ぶ。なぜなら、思わずほとぼり出る言葉は「からだ語」だからである。</p> <p>私の目の前で語られるこの「からだ語」を、私は、見たり、聞いたり、においを嗅いだり（とても日向臭い）、触ったりしている。「からだ語」は、子どもたちの誕生からおよそ3年半の「ひとなる」過程で、すなわち言語で自分を思い通りに表現できないこともあり、からだがいよいよ有効に使われており、非常に大事なことを語っている。そのことは、子どもたちがこれからひとりの＜わたし＞として、そして社会のなかの＜わたしたち＞として生きていく上に大事なことを身につけて行っている過程を表しているのではないだろうか。</p> <p>幼い子どもたちの「からだ語」は、正直である。メルロ＝ポンティは、私が「からだ語」という言葉で言わんとしたいことを次のように表現する。</p>	

所作とその意味とのあいだには、たとえば情動の表現と情動そのものとのあいだには、どんな共通なものがあるかはよくわかっている。すなわち、微笑とかほころびた顔とか軽やかな身のこなしとかのうちには、喜びそのものである行動リズム、世界内存在の様式が現実に含まれている。（『知覚の現象学』1巻 306-7）

メルロ＝ポンティの言葉遣いに従えば、「所作」や「情動の表現」が「からだ語」であり、「その意味」と「情動そのもの」が、「からだ語」が表している意味となる。メルロ＝ポンティが、ここで「世界内存在」という言葉を遣っていることから明らかなように、身体の所作が現れるのは、この身体が世界のなかに他者（「者」も「物」も）と共に住み込んでいるからこそ、起こることなのだ。そして、言葉となると、所作から切り離されたように見えるが、言葉というものは元来情動的意味を持っているものなのである。従って、上記引用文の数行後に、「語も母音も音韻もそれぞれ世界を唱うための仕方である」（『知覚の現象学』1巻 307）、とメルロ＝ポンティが言う時、「世界を唱う」のは、情動的本質を持つ言葉であると理解される。従って、「言葉も世界を唱うための仕方である」を、幼い子どもたちの仕方に従えば、「からだ語も世界を唱うための仕方である」と言い換えることができる。

人生の最初期の三年間は、その後の人生のなかで、記憶として言葉で表現されることはほとんどない。しかし、「からだ」が記憶している。そして身体の実験の記憶は、一生、身体に宿る。ところが言葉で表現されないために、またあまりにも幼く見えるために、この時期はあまり大事にされず、かえって、おとなのいいなりに操作されるということも起こる。幼い子どもたちと絵本を読むことはどういうことなのか、子どもたちの「からだ語」を記述したいと考えていた時に、出会うべくして出会ったのが、メルロ＝ポンティの現象学の書『知覚の現象学』であった。「子どもと絵本」を研究しているものにとっては、また長年「生きるとはどういうことか」と考え続けてきたものにとっては、『知覚の現象学』は、「生」は「贈り物」であると語ってくれる「本」であったと言える。

私は、哲学は万人のための学問であると思っている。そして、思考し続けることを欲求していたのは私自身であると思っていたが、翻って考えると、私は、子どもたちから、その「現場」から、思索し続けることを要求され続けてきたのでもあった。その場では、複数の、しかも非常に年齢の隔たった主体たちが、お互いの「生」のある時間を、共時的に、間主観的に、触れ合い、メルロ＝ポンティの言葉によれば、私たちの間には「共通の地盤が構成され、私の考えと他者の考えとがただ一つと同じ織物を織り上げる」のだ（『知覚の現象学』2巻 219）。77歳を迎えてみると、子どもたちとは何枚もの織物を織り上げてきたような気がする一方、1枚だけの豊かな模様の織物を織ってきたような気もする。

本論は、序章と終章、その間に3部の構成になっている。

第一部では、「私の「生」の現場、および「子どもたちと絵本を読む」という現場」というテーマのもとに、「子どもたちと絵本を読む」ということの現場（臨床の場）について考える。ふたつの章よりなり、第1章では、私の「生」の現場そのものについて。10歳のときに突如降ってきた問い「なぜ生きているのか」から、アカデミックな場ではあるけれども、私にとっては「生」の現場の地続きである「臨床哲学」に辿り着くまで。第2章では、私にとって「子どもたちと絵本を読む」現場そのものである、45年関わってきた「青山台文庫」についてと、「青山台文庫」の企画のなかで取り組み、17年間続けてきた、本論が焦点を当てる「子どもたちと絵本」の現場である「だっこでえほんの会」について述べる。「青山台文庫」も「だっこでえほんの会」も共に現在も継続中である。

第二部では、「メルロ＝ポンティと子どもの現象学」というテーマのもとに、『知覚の現象学』を中心にして、メルロ＝ポンティが子どもについてどのように考察し記述しているかを考える。『知覚の現象学』では、「子ども」、それも「幼児期」に言及した箇所が多く、私の臨床の場である「子どもたちと絵本」を理解する上で、大きな示唆に富むものである。

第三部では、「誕生からくわし」の生成にむけて—『いないいないばあ』から『おおかみと七ひきのこやぎ』へ—というテーマのもとに、「だっこでえほんの会」に参加しているほぼ4か月のあかちゃんから3歳代の子どもたちと絵本の関係性をメルロ＝ポンティの現象学と織り合わせることから見えてきたことを考える。子どもたちが最初に出会う絵本が『いないいないばあ』（松谷みよ子文、瀬川康男絵、童心社、1967年）であり、3年後に絵本『おおかみと七ひきのこやぎ』（グリム童話、フェリクス・ホフマン絵、福音館書店、1967年）の世界に住み込むようになる人として「ひとなって」いく最初の3年間の考察でもある。

この論考が、人が乳幼児期を丁寧な「段取り」で生きるための、つまり、おとなと子どもの双方が、よりよい人生を生きるための、一つの手立てを指し出すことが出来れば、と願う。また本論は、「子どもと絵本」について、現象学という哲学と結ぶことから生まれた、世界で最初の論考である。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (正 置 友 子)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 教授 浜渦 辰二
	副 査 大阪大学 教授 堀江 剛
	副 査 大阪大学 准教授 本間 直樹
	副 査 大阪大学 元教授 中岡 成文
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：メルロ＝ポンティと〈子どもと絵本〉の現象学
—子どもたちと絵本を読むということ—

学位申請者 正置 友子

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	浜渦 辰二
副査	大阪大学教授	堀江 剛
副査	大阪大学准教授	本間 直樹
副査	大阪大学元教授	中岡 成文

【論文内容の要旨】

本論文は、ほぼ50年間、あかちゃんから小学生、時には高校生くらいまでの子どもたちと絵本を読むという行為を続けてきた体験を踏まえながら、とりわけ誕生して3年間に子どもたちと絵本を読むことがどのような意味を持つのかを、フランスの現象学者メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』を手掛かりにしながら考察したものである。考察は、とくに、①「ひとなる」（ほぼ「一人前になる」に近い）という尾張地方の方言に表される過程の最初の時期の子どもたちがからだ全体で自分を表現している「からだ語」の意味、②そこに関わる絵本を読むことのもつ可能性、③子どもたちと絵本を読むことに関わる他者（特に、親・保育者以外の読み手）の役割、という三つに焦点を当て、そこから、多くの子どもがほぼ「三歳半」頃にリミナリティ（通過儀礼）を体験することにより、自分のことを〈わたし／ぼく〉と呼ぶようになることの意味に触れている。

著者はもともと絵本研究（英国で *A History of Victorian Popular Picture Books* という論文で博士号を取得し、それにより The Harvey Darton Award を受賞している）であるが、幼い子どもたちと絵本を読むことはどうということなのかと考えていた時に、メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』と出会い、同書が「子どもと絵本」を研究している者にとって、また長年「生きるとはどういうことか」と考え続けてきた者にとって、「生」は「贈り物」であると語ってくれる「本」であったという。

本論文は、序章「子どもたちと絵本を読むということ」と終章「あらためて、子どもたちと絵本を読むこと」によって挟まれた3部の構成になっている。

第1部「私の「生」の現場、および「子どもたちと絵本を読む」という現場」では、「子どもたちと絵本を読む」ということの現場（臨床の場）について考察している。第1章「私の「生」の現場—なぜ生きているのか、という問いから臨床哲学へ—」では、10歳のときに突如降ってきた問い「なぜ生きているのか」から、アカデミックな場ではありながら「生」の現場の地続きである「臨床哲学」に辿り着くまでを、本論の背景として描いている。第2章「「子どもたちと絵本を読む」現場—青山台文庫と「だっこでえほんの会」—」では、筆者が45年関わっ

てきた「青山台文庫」、および、「青山台文庫」の企画のなかで取り組み、17年間続けてきた「子どもたちと絵本」の現場である「だっこでえほんの会」について描いている。

第2部「メルロ＝ポンティと子どもの現象学」では、『知覚の現象学』を中心にして、メルロ＝ポンティが子どもについてどのように考察し記述しているかを考察している。第1章「メルロ＝ポンティと子どもの現象学」では、「現象学とは、世界とのあの素朴な接触（世界を前にしての驚き）を取り戻すことである」というメルロ＝ポンティの現象学理解を手掛かりに、子どもたちが絵本の中に何かを発見し、驚く、興奮し、感動する姿を捉えている。第2章「メルロ＝ポンティと子どもの記述」では、『知覚の現象学』にしばしば見出される子どもの記述を手掛かりに子どもたちの絵本との出会いを描写し、それを通じて、子どもの本の研究家パーバラ・バーダーが提示した絵本の定義を、メルロ＝ポンティの現象学的論述によって補完することを試みている。

第三部「誕生からくわたくし」の生成にむけて」では、「だっこでえほんの会」に参加している子どもたちと絵本との関係性をメルロ＝ポンティの現象学と織り合わせることから見えてきたことを、具体的にいくつかの絵本を例に挙げながら考察している。つまり、第1章から第7章まで、『いないいないばあ』『りんご』『もこもこ』『ちょうちょ はやくこないかな』『おおかみと七ひきのこやぎ』『三びきのやぎのがらがらどん』『かいじゅうたちのいるところ』という絵本に子どもたちが出会い、絵本の世界に住み込むことを通じて「ひとになって」いく最初の3年間についての考察となっている。

終章では、子どもたちと絵本を読むという行為を取り囲む、保育園・幼稚園、学校教育、学校図書館、読書ボランティア、図書館、家庭といった環境に触れ、その行為の責任と可能性について論じ問題提起を行っている。

全体の分量としては、A4判横書きで234ページに、本論で考察された絵本をカラーで紹介する付録13ページが添付され、本論は、400字詰め原稿用紙に換算して、約745枚に相当する。

【論文審査の結果の要旨】

長年にわたり子どもたちと絵本を読む活動を続けて来た経験のなかから、とりわけ3歳までの子どもたちの集まる「だっこでえほんの会」において子どもたちと絵本を読む経験の意味を「ひとなる」（尾張方言でほぼ「一人前になる」に近い）と筆者の呼ぶ過程として、メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』のなかの子どもについて書かれた記述と照らし合わせながら丁寧に解き明かすという、独自の現象学的アプローチが成功した論文になっている。単なる「子どもの現象学」でも「絵本の社会的・心理学的な効用に関する研究」でもなく、実際の著者の実践活動を通じた臨床哲学的な研究として、「絵本を読む」という経験がもつ可能性を提示し、臨床哲学の新生面を切り開いたと評価できる。また、著者のこどもたち、母たちへの愛は文章の隅々まで行きわたり、ケアの倫理に貫かれた哲学的文体を織りなし、読むものに論証をこえた感銘を与えとも評価された。

公開審査会では、望むらくは、非自然的・技術的な環境が急速に整備される現代社会において子どもたちと絵本を読むことがもつ可能性を、いま一つ緻密な概念的整理との架橋をさらに推し進めて、示していただきたい、という期待の声もあった。著者自身の来歴と絵本とこどもたちとの出会いについて割かれた厚い記述もまた、本論文全体の考察の序説ではなく、「図」としての現象学的考察にとって不可欠な「地」を構成し、臨床哲学としての論考に高い完成度を与えていると、評価する声もあった。

まだまだきちんと議論を詰めてもらいたいところもないわけではないが、それは今後取り組むべき課題であり、本論文の本質的な価値を損なうものではない。子どもと絵本を読むことについて、著者なりの現象学と臨床哲学についての考えを駆使しながら考察を加えた点において、高く評価することができるものとして意見は一致した。

よって、本論文を博士（学術）の学位にふさわしいものと認定する。